青森・高間（たかま）（一）遺跡

1　所在地　青森市大字石江字高間

2　調査期間　二〇〇五年度調査　二〇〇五年（平17）四月～一一月

3　発掘機関　青森市教育委員会

4　調査担当者　木村淳一・設楽政健・相馬俊也

5　遺跡の種類　集落跡

6　遺跡の年代　縄文時代、弥生時代、平安時代～近代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

高間（一）遺跡は、青森市西部の国道七号線とJR新青森駅の間の標高九m前後の丘陵地に立地する。新青森駅周辺の土地区画整理事業に伴い、二〇〇三年度から高間（一）・高間（六）・新城平岡（四）・新田（一）の四遺跡を対象に調査を継続して実施している。

（油川・青森西部）

高間（一）遺跡では、三カ年で約三六〇〇〇㎡を調査し、縄文時代の竪穴住居・貯蔵穴・落とし穴状遺構、平安時代の竪穴住居・土坑・井戸・溝・円形周溝・鉄生産関連遺構・ピット、中世の掘立柱建物・井戸・溝・土坑・ピットなどの遺構を検出した。遺物は、縄文土器・石器、弥生土器、平安時代の土師器・須恵器・擦文土器、中世の木製品・陶磁器などが出土している。

木簡は、E－二区の中世の井戸SK－二四六から一七点出土した。SK－二四六は平面が不整円形を呈し、長径一五八cm短径一五一cm深さ四一五cmを測る素掘りの井戸である。井戸の中央から長さ二・五mの角材が突き刺さった状態で出土しており、木簡はその角材を取り囲むように深さ約二・八mの黒色腐植土層からまとまって出土した。共伴遺物もほとんどが木製品である。

井戸SK－二四六の年代は、木簡(9)の年紀寛喜三年（一二三一）が参考になる。周辺には、年代は特定できないものの掘立柱建物が群在し、隣接する新田（一）遺跡からも一二世紀後半から一三世紀前半の手づくねかわらけが出土している。本遺跡内に一三世紀前半の集落が存在したことは明らかであろう。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「（カーンマーン）」　188×43.5×2.5　061

(2)　「（キリーク）」　185×37.5×2.5　061

(6)

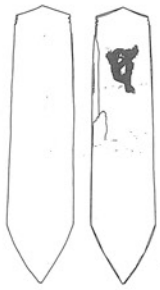
(5)

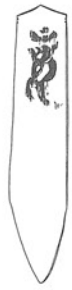
(4)

(3)

(2)

(1)


(11)

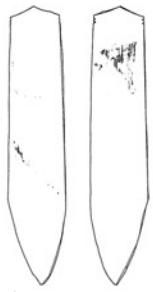

(10)

(9)

(8)

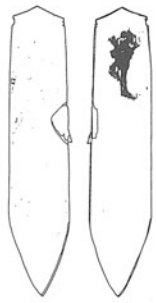
(7)

(14)

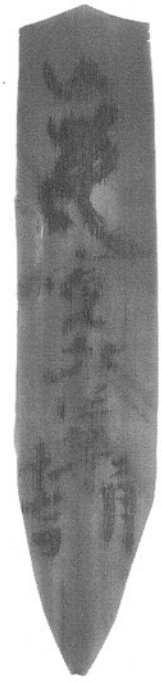

(13)

(12)

(17)


(16)

(15)


(9)赤外線画像

(3) 「(キリーク)」 (166)×41×2 061

(4) 「(キリーク)」 191.8×38.5×3 061

(5) 「(キリーク)カ」 188.2×43×3 061

(6) 「(キリーク)カ」 192×38×3.2 061

(7) 「(キリーク)カ」 192×40×3 061

(8) 「(ウーン)」 190×39.5×2 061

(9) 「(ウーン)」 寛喜三年二月十七日」 190×40×3 061

(10) 「(ウーン)」 185×37×2.8 061

(11) ・「(バ)」 184×42.5×2.8 061

・「□」 192×40.5×5.5 061

(12) 「(バ)」

(13) ・「(サ)」 185×38×4.2 061

・「□」

(14) 「(サ)」 190×40×3.5 061

(15) 「(サク)」 191.5×40.2×3.3 061

(16) ・「(ベイ)カ」

・「□」 192×40×4.5 061

(17) 「□」 184.5×37.2×2.8 061

いずれも笹塔婆である。上端が圭頭状に形作られ、頭部に浅い切り込みが二カ所入れられている。(9)は寛喜三年（一二三一）の紀年木簡である。「喜」は異体字「𡚁」を用いる。(11)(13)(16)は裏面にも墨痕が確認されているが、判読には至らなかった。

(1)のカーンマーンは不動明王の種子、(2)～(7)のキリークは阿弥陀如来または千手観音の種子、(8)～(10)のウーンは阿閦、もしくは明王部の通種子であるが、この資料のみでは特定不能。(11)(12)のバは水天の種子でもあるが、ウーン同様この資料のみでは特定不能。(13)(14)のサは聖観音の種子、(15)のサクは勢至菩薩の種子、(16)のベイは毘沙門天または多聞天の種子である。

なお、梵字の釈読とその解釈は千住寺の木下密運氏のご教示による。また、釈読にあたっては、奈良文化財研究所の渡辺晃宏・馬場基・山本崇各氏のご教示を得た。

（木村淳一）